

平成 30 年度第 1 回まちづくりボランティアセンター運営委員会

【Bグループ討議要旨】

テーマ：まちづくりボランティアセンターのめざすもの

【端田委員】 グループ討議の論点の説明を

【事務局（福澤）】 今年の 4 月から「まちづくりボランティアセンター（以下まちづくり VC）」に名前を変えた。ただ中身として何が変わったかと言われると、正直特に何かを目指して名前を変えたわけではない。ただ、国の地域力強化検討会で社協の VC に触れているところがある。そのなかでは、ボランティアの養成だけではなく暮らし、仕事、歴史文化含めて地域づくりを含めてまちづくり VC にして間口や取り組みをひろげては？となり名称を変えた。運営委員会のみなさんと一緒に長野県ならではのまちづくり VC が何をめざすのか？何を取り組むのか？考えたい。次の運営委員会にむけて整理をしたい。

【端田委員】 発表は福澤さんね

① 「協働」の推進方法② VC の組織・人材育成③ 「ボランタリー=自主的」な活動への支援とは？と 3 つお題があるが、これに沿ってどれかに触れるような意見がほしい。その他も含めて意見がほしい。

社会保障制度が大きく変わっていく中で地域の互助的システムを期待されている。そうはいつでも、ボラの減少、団体の継承が難しいという状況もある中で。どのようにまちづくり VC をめざしていくか。どんなまちづくり VC を目指していくか。

【山田委員】 ボランティアは変わり目。過渡期。私がコーディネーターになったのは昭和 56 年。ボランティア元年。点字とか。45 年くらい。半世紀。その間のはぼり調子。経済とボランティア活動が成長してきた流れがあったのでは。高齢者が高齢化するピークに達しようとしている中であれっという状況。NPO という立場でボランティアを募集しても、5 年くらい前から 1 人か 2 人しか集まらない状況もある。大阪の芦屋市の要約筆記のボランティア講座の話聞いたらたった 1 人。講師は 9 人。参加者は高齢だからそんなになれないかも、、と話すようなそんな状態。聞きたいのは、分析までいってこんな結果？県社協として分析ができているのか？

【事務局（福澤）】 今まで正直言って分析はできていない状況。市町村社協の中でもどうして減ったのか、と思っていると思うが、そこまでは聞けていない状況。

【山田委員】 先日 NPO の 20 周年のフォーラムがあり、目からウロコだった。NPO と協働していきたいところは？企業、行政、社協、、、と出ていて、個人、市民、住民という項目もあった。NPO も個人と住民と協働していく時代。ボランティアもそれと一緒にするのは？個人とどうやって協働していくのか。

【戸田委員】 ②③がリンクしていると思う。VCを設置している数字が57。更にボランティアコーディネーターの設置している調査はしている？

【事務局（福澤）】 している。今回は出せていない。

【戸田委員】 コーディネーターが減っていれば当然ボランティアの相談が減っているのは当たり前。②③の自発性、自主性が生まれる背景にもつながっているのでは？災害が起きたり、自分が当事者になるとか、課題から生まれるも一つ。ボランティアになるとかも一つ。誘われて学びの講座にいて、といういろんな背景がある。それをうまくコーディネーションすること。センターの設置ではなく、やっぱり手間暇がかかるので、人がいないと自発性を育むコーディネートはできないと思う。災害でたくさんボランティアが集まる。自分の町ではボランティアをしないけど、災害が起きた遠い町にはボランティアに行く、という人もいる。地域に根付くチャンス。VCやコーディネーターがいないとそのしかけていくことが難しいのかなと感じる。全国の都道府県のシニア大学の見直しの時期が来ている。行政から補助金が出ているし、受講料もかかる。（長野では1万円）友達をつくるとかカルチャー的な学びにお金を出すのは？という議論がある。長野県でも5年前見直すように言われた。長野県が先進的だと九州からも視察が来ている。学びやカルチャーから入っても、コーディネーターがつなぐことによって十分活動者になる。コーディネーションすることが大切。そこが抜けているとつながっていかないと思う。②③のコーディネーションはここでしかできないから改めて必要性を感じる。

【村松委員】 地域福祉支援計画を作成している。その中でも人材育成が必要と話が出ている。行政から話を出すのは簡単だけれども、どうしてもそうすると1回限りで終わってしまい地域の中で根付いていかない。地域の中に動いていただく方に福祉的な視点を持っていただくために、どうしたらいいのか、ボランティアをしている方にも、知っていく必要があるのではないかと感じる。

【宮下委員】 人のつながりは基本。いわゆる縦のつながり（組織とか）を越えた横のつながりが大事なのではないかと感じる。それはどこの現場でもいえること。リーダー格を育てるむずかしさもある。教育現場では、教科が増え、時間が足りない。かつての「ゆとり教育」で目指していたものは、地域の方とともに子どもたちを育てていくスタイル。今は、それを排除していかざるをえない現状がある。文科省型や信州型のコミュニティースクール化で地域の方にボランティアをお願いし、地域の方と共に子どもを育てている。一方で、学校の統廃合が進み、地域のコミュニティーがなくなることも。地域とのつながりが難しくなっている。

【中橋委員】 ボランティアにもってかれる時代。何でもボランティアにもってかれる。ボランティアってなんなんだろうか。ボランティアなら何でもまかなえるという感じで物事が送られている。例えば安曇野でボランティアのスクールを開催。声をか

けてもニーズがありすぎて、ボランティアクラブの子どもたちを引っ張り合いをしている。災害地の支援に行く時間もない状況。何でもボランティアでいいのか考えた時に、まちづくりVCを考えて、ねらいは福祉のまちづくりVCだと思う。まずはボランティアをとって、福祉のまちづくりセンターとして、何をやるのか、きちんとボラと仕事部分と分けて考えない限り、世の中の流れと一緒になっちゃう。そこをきちんとやり直すべきでは。

災害現場だと、個人の家とか、顔の見える場にはものすごい。でも、顔の見えないところには応募が少ない傾向がある。個人とか住民と協働するには、くらしに根付いた部分や、課題だけじゃなくその人の全体を見られるようなコーディネーターの方向について人材育成の方向。市町村社協の専門性、得意技はなんかのか、福祉の専門家というイメージで見られている割には、ぼんやりしてるのかな。そこをはっきりさせないとつらい。特化して、例えばまち歩きとか？何でも屋みたいな扱いをしないで分けてやらないと。企業の人材育成を活用しながら上手に進めていくことも必要では？

【端田委員】 学生と関わって切実な問題は、ボランティアをしたい学生はたくさんいる。しかし、ボランティア先まで行くお金がない。足の確保ができないからいけないという問題がある。実働 600 として、足がないから行けないという人の割合がその倍くらいあるんじゃないかなと思う。遠方からの依頼には、交通費か迎えを出さないと断っている状態。若者がお金がない状態が我々の時代と比べても多いように感じる。本当に地域福祉を学びたい学生はまともなバイトをしていても金にならないから、スナックで働いたりパパ活とかママ活とかしておこずかいをもらいながらボランティアをしている話も聞く。その子たちの中で共通している背景は、人とのつながりの希薄さ。昼間は誰かとつながりたい。その延長線上でだれかと触れ合うようなアルバイトをしたり。そこまでしなくてもお金稼げるのになあと思う学生が男女で増えてきている。ボランティアをやりたい人が求めているのはつながりの希薄さを埋めるようにそれが報酬となって活動の場につながる。必要としてる現場サイドにもボランティア側のニーズを見据えて提供できることを考えるスタンスも大切なんじゃないかなと感じる。本学の場合は完全SNSでボランティアコーディネートをしている。例えば、社協からFAXで参加人数教えてと言われると、わざわざコンビニでFAXを送る学生もいる。若者との連絡手段も各市町村のコーディネーターにもあればいいのでは？調査には後方支援を含めて、HPを設置しているか、SNSで情報発信できるかということも調査する市町村社協の広報力が見えてくるのでは？

ざっと意見をもらった。もっと聞きたいところは？

【事務局（清水）】 ボランティアに何でもお願いしてしまう。例えば学生にボランティアをお願いするときに、あれお願いこれお願いと話してしまうが、ボランティアの自発性と言われるとモヤモヤしてしまう。自発性について教えてほしい。

【中橋委員】 用意してやってもらうことを洗い出しすることも大事。最初から自発性といっても誰も来ない。

【端田委員】 宮下先生、脱ゆとりと関係あるのかはわからないけれど、大学3年生くらいから今までは一つ二つ提供すれば動き出す人がいたが、最近は大学生の変化なのかお膳立てを手厚くしないと動き出せない学生が増えているように感じる。教育現場ではそんな中高生、小学生と世代の変化や自発性について考えられる点がありますか。

【宮下委員】 まさしく。小中学校の学ぶ意欲や生活意欲において、よくいえば従順。20年30年の中で、非行の低年齢化があった。今もあるが、今の子はおりこうさんな子が多い。表面的には素直で学ぶ意欲もあるように見える。それは、学校現場が非常に細分化され、丁寧に教育している現れでもある。手を引き背中を押し、二人三脚で行う例も。サポート体制が整っている。それはいいことなのだけれども、本人の足で歩くという一番大切にしなければいけない自発性が損なわれていることもある。大学の先生と話すと学生も年々おとなしくなっているのではないかと話している。言われたことはちゃんとやるし真面目な学生が多いのだけれども、新しい独創的な発想やベンチャー的な視点を持っている学生が少ないと聞く。小さいうちからボランティアや福祉に関する教育をもう一度見直さなければならぬのかなと思う。道徳や人権教育のなかで相手を理解し助けていく大切さを教えてはいるが、実際の体験の場は少ない。核家族化などの限られた家庭環境もあるが、人間関係が希薄なのは言わずもがな。そういう学校の中でボランティア精神を育むのも時間も限られている。現場としては大きな問題。幼稚園・保育園の頃から、系統化したボランティア体験が必要だと思う。

【戸田委員】 全国のどんな背景があったらやる気になっただろうと高校生と大学生4,5人にヒアリングを行った。なぜこの活動をやることになったか聞いたときに、驚いた。5人に共通していたのが、学校では人の顔色を見て生活している。というのが共通。なんとかこの生活を変えられないか考えて参加。ある子は親に言われて進学校に通って、国立大学へ進学することくらいが目標で、それに嫌気がさして参加した子も。その時にたまたまサマーキャンプやインターンシップ、スタディーツアーのようなものがあり、誘われた子が半分、他半分は学校に居場所がなくて、顔色がうかがってなんとなく学校に貼ってあったものを見て、やってみよっかなと思って参加した子も。そこに飛び込んだらその中でぶつかり合う経験をしたというのが一緒だった。学校ではそんな経験がなかった。別々の学校から集まり、色々な話をしてぶつかり合う中で信頼関係が生まれた。友達ってこういうことかと感じたことも共通していた。今の子供たちはつながりやぶつかり合う経験がない。このことから、まちづくりVCっていうと、長野でもサマーキャンプを行っている。障がい者と関わったり、車いすを動かしてみる体験など様々。公民館や社協、NPOが開いているものも。実は社協やNPOは若者が入口っていうのは実はやめちゃってる。公民館は続けているところが多い。今は学校ではない場のプログラムってないのか

も感じる。長野市社協もサマーチャレンジボランティアを全国に先駆けてやっているが、学校の先生に行けと言われた子、推薦入学で役に立つと言われた子。ある一定の数は学校に居場所をみつけにくる子もいる。サマーキャンプに参加することによって高齢者施設でおじいちゃんおばあちゃんと触れ合うことによって夏休みのうちに変わっていった子も。その頃参加していた子は福祉業界に関わっている人も県内に広がっている。まちづくりVCとして県社協が市町村社協のプログラム応援する役割、人材育成が必要なのでは。ハブ的な役割が必要。

コーディネーターが受けた相談をこれはボランティアがやるべきことなのか。これは仕事じゃないのか。とか、このことによってもしかしたら仕事が生み出せるんじゃないのか、これによって仕事が生み出せるようにコーディネーションできるんじゃないのか、というコーディネーションの軸をどうとらえるか。軸をもっているコーディネーターを専門性として人材育成することが必要。旗を県社協に振ってほしい。市町村自体で育てられなければ県社協が柱を持って旗を振ってほしい。

【山田委員】 人をつくるのはリーダーだと思う。コーディネーターの重要性を最近特に感じる。中橋先生が言うように全部地域福祉と言われる時代の中で、末端のお年寄りとか地域で暮らしている住民を本来行政がやらなきゃいけないことまでボランティアや住民自治協議会に押しつける。コーディネーターの専門性が必要なのに関わらず地域のちょっとしたおばさんに頼んで押し込む。本当にボランティアをつくる。としたらなんのためにつくるの？地域でボランティアを養成しなさいと言ったらお年寄りなど課題のある人達を支援するボランティアを養成する流れになっている。昔なら安上がりボランティアと言われていた。初期は抵抗していた。そういうことをきっちり言えるコーディネーターがいないのでは？そういう人をつくるのがいいのか、苦い経験もある。東京（長野？）オリンピックや神戸の震災でボランティアが良い形で展開してきて、大事に育てて、自立したボランティアを育成してきた。一気にオリンピックボランティア、災害ボランティアが大きくなり、主流になってしまった。まるでお祭り気分であちをボランティアがつくっているかのように。そうすると、今まで丁寧に丁寧に育ててきたボランティアが荒らされたように感じた。オリンピックに関わった人は、いわゆるわれわれが期待していたまちづくりの力になるようなボランティアは残らなかった。それが苦い経験。いまは東京オリンピックがブラック労働とか言われている。そこにも危機感を感じている。重要なことを駆逐してしまうのでは。その前にまっとうなリーダーを作り上げていくのを県社協に求められているのでは。切にお願いしたい。

【宮下委員】 阪神淡路大震災の頃は、行政がボランティアの「なんとかしてあげたい」という気持ちにすべて任せてしまっていたような。受け皿もできてなかったし、行政がおんぶにだっこだったのでは。イギリスなど、本来の成熟したボランティアは正当な報酬も得ているし、政府とは距離を置いた独自性を尊重している。山田さんが言っていた過渡期にあるとの指摘が意外だった。ボランティアが集まらない、逆に学生はやりたくてもできない、何か双方のズレがあるのではないかと。本来は意識

があると思うけど、ボランティアじゃ生活はできない。そのようなところも声をあげていく必要があるのではないかと思うし、何でもかんでも自分の都合が悪いこと、やりたくないことをボランティアに任せ、安易な動機でボランティアを酷使するのは間違っているのではないか。

【山田委員】 利用されている感じがする。そうじゃないんだと・・・自立したい、市民もね。

【事務局（福澤）】 国の動きも地域へ地域へとやっているけれども、見方を変えると国も地域の力を利用するんじゃないかと思ってしまうことも。地域の住民主体で、というときに一過性ではなく持続できるのかというところを考えなければいけないと思う。

【中橋委員】 長野の場合は、結局何でもボランティアでまかなってしまうと、地域の産業も育っていかない。外から入ってくる人たちは小さな生業の境界くらいのところで生計を立てている人も入ってきているのに、そこをボランティアでまかなってしまうと、なくなってしまい、若い人が入ってくるころがなくなってしまう。くらしを助長し、地域創生を奪ってしまう恐れもある。大町や美麻や天龍もそういうやり方をしている人もいる。地域おこしとして入っている人以外、その人たちが残っていくときに生業としなければいけないのに、ボランティア、ボランティアと言ってしまうと残れない。社協が行政に説明しないと。行政はわからないからどんどん減っていく。

【戸田委員】 社協の職員がきちんと、行政に対して社協とはを説明できない。社協側が情けない。その前に社協がどういうものか説明できているのか。行政に文句ばかり言っていないで社協の職員が説明できないと。社会福祉法人の中でも施設とは違う。そういうこともわかっていてきちんと底上げしていかないといけない。

【中橋委員】 県社協のまちづくりVCの中でも冊子とか作るとか。やっていたら。

【事務局（福澤）】 私も言えるようになります。何でも屋だと思ってやってるから、。

【端田委員】 福祉サービスの担い手として4つのセクター（行政、営利、非営利、ボランティアやインフォーマル）の境界が崩れてきている。社協がVCや非営利団体や非営利組織や個人のボランティアへの支援とそれぞれ整理、未分化していくことが必要なのでは？社協の仕事なのでは、というところもNPOセンターが受けたりしてるところもある。

【事務局（福澤）】 長野市が頭に浮かんだ、市民協働サポートセンターもそう？

【戸田委員】 長野市だけじゃなくて全国的にそうで、日本NPOセンターがそうして

いるから。地域とつながっていかうといっている。それに対する社協も危機感を感じなきゃだめだと思う。

【端田委員】 頼らざるをえない行政責任。社会保障財源上、やむを得ないところもあるが、その代替として高齢者サロンづくりが期待されている。社協よりも包括に、という部分も。地域によっては社協と包括があんまりつながっていないところもある。いわゆる福祉サービス機関と地域に点在する非営利組織と一般市民とのリンケージというのを社協がどのように仕掛けをしていくか、それをすることで社協にお金は入る？

【事務局（福澤）】 個人的な考えで言うと、事業じゃないところをやらないと事業化できない。そこにお金や意味がついてくる？社協として中橋先生が言った福祉のまちづくりCとしてボランティアな活動だったり、NPOだったり、企業だったり、教育だったり相談を受けとめたり、どのように展開しつなぐか考えないと事業化にもならないのでは。どういう風に地域の中で活用できるのかなと考える。今の時点ではお金はあまりついていないのでお金ありきで考えるよりは、それ以外の部分でどこまで対応できるのか。

【中橋委員】 学生に対しての情報提供。それを県社協がやるとか。アンテナをきちんとはっていくことが必要。やりやすいところをとっかかりとして始めるのはどうか。県社協が持たなければ。

【事務局（福澤）】 いろんなとこでつながったアンテナから情報が入ってくることも。

【宮下委員】 社協と教育現場とのつながりは希薄。普段は顔が見えない。今はボランティア新聞でつながりがある。ネットワークを含めて情報のシンクタンク機能が必要。
ボランティアで行きたいと思ったときに、自分には何ができるんだろうと感じる。せいぜい授業くらいなら教えられるけど、それでもいいのかなと思う。

【山田委員】 なりますなります。いっぱいあります。

【宮下委員】 そういうところでコーディネートが必要なんじゃない？

【山田委員】 現場にいるとスタッフだけでは足りない。子どもの居場所や就労で働かない若者を引っ張り出すとかスタッフでは限界があるそこに市民が関わってくれたらこの人はどれだけいきいきと暮らせるのかそういう事例がたくさん。どこがそういう人をつくってくれるのか。ボランティアの要素っていっぱいあるんですよ。これだったらできるよ、というちょっとした時間。

【中橋委員】 マッチングが先走り、この人を生かす、というコーディネートが必要。

たとえば宮下さんが来た時に宮下さんの授業として新しく仕立てる、ようなそんなコーディネートができない。

【端田委員】 学習支援もボランティアでできる部分とできない部分も。退職した先生の中でネットワーク作ることとか。

【宮下委員】 教育部門、とかネットワークを作りながら人材バンクとして経験をいかす、ってことも必要なのでは。

【山田委員】 それができたら日本が変わるよ。

【戸田委員】 シニア大は 2000 人以上いる。情報がすごい。そこでコーディネーターがニーズを活用すると、地域振興のボランティアに変わる。創り出す、掘り起こす、探すとかシニアと一緒にやっている。その方が楽しい。そういう力はひつよう。V Cは社協の出島的存在。住民に一番近いので最前線の課題が見えてくる。LGBTとかいろんな課題を、そういう情報を持っているからこそ、いいポジションだと思うのは、行政でもNPOでもどこにでも働きかけできること。

長野県社会まわくりVCのめざすもの

H30.12.13 運営委員会

ボラの養成
して
地域まわくり
↓
まわくりVCへ

何をめざす?

Vの新

山田
Vは初期
Vの募集として募集したい。
ex. V1人=講師9人とか
県社協と連携してVの分析はどうか!

戸田
VCの設置の敷、VCの敷
自発性や活動の質を
どうにかしてVの活用
して、見出しの活用

村松
Vの活用
福祉視点の活用
Fの活用

宮下
人のつなぐ
横のつなぐ
地域の方と連携
地域の方と連携

中橋
Vって何?
地域まわくり
"まわくりVC"として
何をする?

高田
VC活用 → VC活用
Fの活用、Fの活用
若年世代、Fの活用
若年の活用
環境Vの活用
SNS

① 協働の推進

NPOも人口の協働していく時代。
人のつなぐ、横のつなぐ
地域と連携して活動する → 地域の方と連携
"まわくりVC"として役割の明確化
SNSの活用
小ぶりからのボランティア体験 → 学校の中でボランティア精神を育てたい
NPOや地域とつながっている(村松は産協) →
学校、地域と連携して活動する

② VCの組織・人材育成

地域福祉計画、議論が出ている → 福祉的視点
1人1役をどう育てるのか
課題は多いけれど、今年をみれば人材育成 → 専門性 → 県社協がプログラム
市町村社協の役割

③ 「ボラタリ」= 自発的な活動の支援とは?

自発性を損なわないコーディネーション
ボランティアの活動の場、何を実現している
VC活用 → VC活用 → お金の活用 → 足の確保が重要。(半信半疑) →
"ボラタリ"と表現する学生増
環境、Vの活用
SNSの活用(連絡先)

自発性
"何をやるか"ではなく
"どうやるか"が重要
自発性、自発性、自発性
自発性、自発性、自発性
自発性、自発性、自発性

ボランティアは何を
目指す?
"なにを
違う!"

産業の活性化
地域創生を牽引する
ボランティアの生活支援
社会の発展やFの活用
Vの活用、環境が重要
地域の発展(住民NPO...)

情報発信
地域の方から
Fの活用、Fの活用
Fの活用、Fの活用
Fの活用、Fの活用

コーディネーターの
コーディネーションの
人材育成 (VCo)

自分に
何が
できるか
を
考える

やる気
高校生、学生に
学校での活動の場
Fの活用、Fの活用

地域のボランティア

専らボランティアの増加?!
→ ともいえる
自由なボランティアの育成
→ オリジナル、受容
→ Fの活用、Fの活用
ボランティアの活用
ボランティアの活用、Fの活用
利用されている感じがある...

居場所

ボランティアは活動の場
居場所 →
県社協が支援する

コーディネーターは
協働の推進役!

若者が入口のプログラム
少人数の活用